



Title	Mapping the space of Ainu people's participation in museums : A case study on Nibutani kotan [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	UBALDE, MARRIANNE FORTAJADA
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第14721号
Issue Date	2021-09-24
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/82993
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Marriane_Ubalde_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名：ウバルデ・マリアン・フォルタハダ

主査 教授 佐々木 亨
審査委員 副査 教授 小田 博志
副査 准教授 山崎 幸治

学位論文題名

Mapping the space of Ainu people's participation in museums: A case study on Nibutani Kotan
(博物館におけるアイヌ民族の参加状況について-二風谷コタンの事例研究を通して-)

・当該研究領域における本論文の研究成果

当該研究領域である博物館学における本論文の研究成果は、次の3つである。

1 つめは、博物館における個別の活動に対して、博物館側の役割、参加者側の役割、さらに活動におけるアウトプットという観点から、「貢献的プロジェクト」、「共同的项目」、「共創的プロジェクト」、「主催プロジェクト」の順で参加者側の自由度が高くなるという、参加・協働のあり方を4分類したSimon (2010) の分析手法を用いて、二風谷アイヌ文化博物館および二風谷コタンなどで開催されている7つの活動を対象に、参加・協働のあり方を分類した点である。対象とした活動は、博物館における常設展示・特別展示、体験学習プログラム、チセノミ、チセの建造と修復プログラム、平取の文化的景観を学ぶバスツアー、沙流川でのチプサンケである。その結果、活動が博物館によって管理され、参加者は積極的なパートナーとして位置づけられる「共同的项目」に5つのプログラムが分類された。一方で、博物館は参加者を管理することはなく、参加者は望むものを制作できる「主催プロジェクト」には、チセの建造と修復プログラムとチプサンケの2つが該当することが判明した。その結果、参加者であるアイヌ系地域住民がより多くの権限を持つことを目指す場合、「主催プロジェクト」や「共創的項目」に移行する必要があるとした。

2 つめの研究成果として、これまでとはまったく異なる環境と方法で行われた参加・協働のあり方を明示した点である。博物館とアイヌ民族との従来との関係は、展示する側と展示される側の協働が少なく、その結果としてアイヌ文化展示の内容が伝統文化に偏っているという状況であった。しかし近年、2015年に北海道博物館、2016年に国立民族学博物館の常設展示においてアイヌ展示のリニューアルが行われ、さまざまな形でアイヌ民族との協働を実現した。本論文の事例は、アイヌ・コミュニティの中にある博物館での展示制作、諸活動の実施であり、この2つの博物館とはまったく異なる環境と方法で行われた。このことは、展示する側と展示される側の協働に関する議論において、今後貴重な報告となる。

3 つめは、どのようにして展示される側の参加・協働を可能にしているのかを考察した結果、同博物館・同地域における活動を、博物館学の文脈で「エコミュージアム」と捉えた点である。博物館学において、エコミュージアムは最近再び関心が寄せられている概念であるが、日本におけるエコミュージアムの問題点として、1) 地元の博物館との関係が弱い、2) 観光による地域開発の要素が強すぎる、3) 地域住民や地域に根ざした組織の参加が不十分であるという点が指摘されてきた。しかしここでは、これらの問題点をクリアした上で、地域の発展だけでなく、地域住民の学びがあり、次世代に文化を引き継ぐ機会を提供するというエコミュージ

アムの本来的価値を実現している数少ない事例と位置づけ、参加・協働を可能にしているとした。このことは、博物館学のエコミュージアム研究において、新たなエコミュージアム像を提示したと言える。

・学位授与に関する委員会の所見

申請者は国費留学生として本論文をまとめたが、この間のコロナ禍により、フィールドワークがまったくできない期間があり、時間的にきびしい研究環境であった。そのような中、2019年5～6月の2ヶ月間にわたる、二風谷アイヌ文化博物館におけるインターンシップによって収集した実証的なデータが、非常に豊富でかつ有効であったことは評価できる。

一方、口頭試問において、第2章の博物館に関連する法律やアイヌ諸団体の活動に関する整理、および第4章で展開したアイヌ民族としてのアイデンティティのあり方に関する考察が、第6章の分析において十分に活用されていないとの指摘があった。また、北海道博物館や国立民族学博物館におけるアイヌ文化展示のリニューアルとは別の方法で、二風谷ではアイヌ系地域住民との協働を実現しているが、この事例がほかの博物館や地域に、今後どのような影響を与えることができるのかとの質問もあった。しかし、これらの点に関して申請者はすでに認識しており、今後研究が進むことで解決できるものであり、本論文の成果を損なうものではないと判断した。なお、本論文の第3章の一部は、査読を経て2021年3月に *The International Journal of the Inclusive Museum* (Vol 14, Issue 1) に掲載された。

以上の審査の結果、審査委員会は全員一致して、本論文の著者であるウバルデ・マリアン・フォルタハダ氏に博士(文学)の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。